

令和 6 年度評価委員会の結果 （令和 5 年度終了課題に対する事後評価）

＜評価委員一覧＞

氏名	現職等
後藤 晋	東京大学大学院農学生命科学研究科 付属演習林田無演習林 准教授
山口 能邦	埼玉県山林種苗協同組合 理事
井原 愛子	株式会社 TAP&SAP 代表取締役
坂本 裕子	女性林業グループ「ちちぶ・やま姫」 会長

※所属は、令和 6 年 10 月現在のものです。（敬称略）

＜評価結果＞

研究課題名	マイタケ原木栽培における収穫期の遅延実証試験	
研究担当	育種・森林資源担当	
研究期間	平成 27～令和 5 年度	
研究概要	<p>(1) シート断水法</p> <p>原木マイタケほだ場に梅雨時期から収穫期まで断水シートを設置することによりマイタケの子実体発生時期を遅延させる手法の有効性を検証した。平成 27 年度から令和 5 年度までの試験の結果、本手法による収穫日の遅延日数は平均して 4.1 日間であった。ほだ木 1 本あたりの子実体収穫個数については、平成 29 年度に造成したほだ場では 2.02 個/ほだ木であり、通常の方法で栽培した対照区における 1.97 個/ほだ木とほぼ同等であった。上記の結果より、本手法では収量は通常の栽培方法と同等である一方で、収穫期の遅延には強く寄与しなかった。断水の手法により収穫期の遅延を達成するためには、更なる工夫が必要である。</p> <p>(2) 裸地ほだ場法</p> <p>原木マイタケほだ場を通常の林内環境でなく裸地に造成することによりマイタケの子実体発生時期を遅延させる手法の有効性を検証した。平成 27 年度から令和 5 年度までの試験の結果、本手法による収穫日の遅延日数は平均して 17.9 日間であった。ほだ木 1 本あたりの子実体収穫個数については、令和元年度に造成したほだ場では 0.49 個/ほだ木であり、通常の方法で栽培した対照区における 1.97 個/ほだ木のほぼ 1/4 であった。上記の結果より、本手法では収量が通常の栽培方法より減少する一方で、収穫期を 2 週間以上遅延させることができた。この結果から単純計算すると、通常栽培と比較して本手法が経営的に有利であるためには商品（収穫した子</p>	

	実体) の価格を 4 倍程度に設定する必要がある。一方で、子実体の一部は収穫期の終期に発生し、低温と乾燥により出荷に適した大きさに発育せずに枯死していることから、これらの子実体を正常に発育させることによって生産性が向上する見込みが残されている。	
研究評価	評価の要素	目標達成度：d
		活用見込み：c
	総合評価	C